

5 推奨される放牧の管理方法

(1) 推奨される頭数、区画数、面積、放牧日数

$$\frac{\text{草量} \times \text{面積} \times \text{放牧利用率}}{\text{1 頭当たりの採食量} \times \text{滞牧日数}} = \text{放牧可能頭数}$$

【滞牧期間からみた放牧頭数の算出例】

牧区の面積10ha、草量8 t/ha、放牧利用率60%、牛1頭当たりの採食量60kg、滞牧期間6日とした場合、その牧区への放牧可能頭数は下記のとおり算出する。

$$\frac{8,000\text{kg} \times 10\text{ha} \times 60\%}{60\text{kg} \times 6\text{日}} = 133\text{頭} \quad \div \quad 130\text{頭}$$

※各季節における生産草量、採食可能量からみると、放牧利用率は春が60%、夏が50%、秋が70%を目安にする。

(2) 滞牧日数と休牧日数

滞牧日数が長いと過放牧の状態になり、牧草の再生力が弱まることから、草地荒廃の原因になる。

また、休牧日数が長ければ草量が多くなり利用率の低下を、短ければ草量の不足を招く。

【滞牧日数の目安】

一応の目安として、3～5日、長くても1週間以内とする。

【休牧日数の目安】

牧草の季節生産性から判断し、5月：15～20日、6～7月：20～25日、8～9月：25～30日を目安にする。

【入牧適期の判定】

イネ科牧草の草丈で20～30cm、草量5～10t/haを目安とする。

【移牧する時期の判定】

残草の草丈5～10cmを目安とする。

(3) 第1回放牧開始時期と放牧終了時期

【第1回放牧開始時期】

放牧開始時期は平均気温8℃前後、イネ科牧草の草丈15～20cm、草量1.5～3.0t/haになる頃を目安とする。